

この討論は、昭和60年11月2日、日本工業倶楽部で開催されました。国語問題協議会主催、第34回国語問題講演会におけるもので、協議会の機関誌「国語国字」第131号に掲載されたものの転載です。

質疑者の筧泰彦先生は学習院大学名誉教授、林巨樹先生は青山学院大学教授、三渚信吾先生は高崎経済大学名誉教授、木内信胤先生は協議会会長です。

次の「国語教育はどうあるべきか」は、翌昭和61年6月14日、同じ日本工業倶楽部で開催された第35回国語問題講演会における講演記録です。

明治以来の国語教育の誤り

わが国の国語教育は、明治以来、四つの大変な誤りの上に行はれて来た、と私は思っています。この四つの誤りを一日も早く改めること、これが「今後の国語教育の在り方」の第一だと思ひます。誤りの第一は、文字を初めて学習する子供たちにとって漢字は難しいと考へ、まづ仮名^{がな}を学習させ、それを学び終へないうちは漢字を教へないことと考へます。

次に誤りの第二は、漢字は字画が少なく、字形の簡単な物ほど覚え^{やす}易く、反対に、字画が多く字形の複雑な物ほど覚え^{にく}難い、といふ考へ方であります。

誤りの第三は、小学校において、一年生が一番漢字を学ぶのが困難で、学年が進むにつれて漢字を覚える能力は高まってゆくと考へてゐること。これが第三の誤りです。

第四は、私が12年程前に発見したことですが、私たちは誰^{だれ}でも「言葉は易^{やさ}しく、漢字は難しい」と考へてゐますが、実は子供にとっては、漢字の方がはるかに覚え^{やす}易いのです。有史以来「言葉は誰^{いうし}でも覚え^{だれ}られるが、文字は能力の高い人でなければ覚えられない」とされてきました。ところが事實は、子供にとっては漢字よりも言葉の方がはるかに覚え^{だれ}にくいものなのです。

以上四つの誤りがあって今後もこの誤りの上に立って教育が続けられる限り、子供たちは苦勞するばかりでなかなか漢字を修得することは出来ないでせう。とりわけ「漢字は難しい」といふ固定觀念が取り除かれない限り、正しい漢字教育は行はれさうもない、と私は思っています。